

鎌倉文士と 文化人ら

下
巻

～鎌倉にこだわり、九十六人^{〔上巻五十人・下巻四十六人〕}の
エピソード・住まい・恋・結婚・
墓標などを記しました～

鎌倉市の成り立ちとゆかりの作家・文化人ら

明治22年(1889)6月16日、東京と軍港のある横須賀を結ぶ目的で、官設鉄道大船駅—横須賀駅の横須賀線開通時に、鎌倉駅が開業する。そして、観光地としての性格が急激に濃くなっていった。また、東京から至近の別荘地として、皇族・華族や政財界の有力者などの一部が別荘を構えるようになり、これらを相手とした観光産業が発展していった。なお、この横須賀線建設工事のため「段葛」は寸断された。

ちなみに江之島電気鉄道路線(現・江ノ島電鉄線)は、明治43年(1910)11月4日に鎌倉方面へ延伸し、大町駅(現在は廃駅)—小町駅(鎌倉駅の前身にあたる、廃駅)間が開通し、これをもって全線開通する。

横須賀線鎌倉駅設置で東京からの便がよくなり、文学者らがこの頃から鎌倉へ訪れるようになる。加えて横須賀線の本数増や、複線化(大正13年)、東京—横須賀間の電化(大正14年)、北鎌倉駅の本駅開設(昭和5年)等もあって、京浜方面や横須賀軍港への通勤を可能にし、海軍軍人や、俗にいう別荘族などの定住化が促進され、東京近郊のベッドタウンとしての性格が強くなっていった。

大正12年(1923)9月1日、関東大震災の発生。鎌倉にも大きな被害あったが、この大震災をきっかけとして、壊滅状態となった東京に比べれば遥かに被害の少なかった鎌倉と浦和(現在のさいたま市浦和区)に多くの文化人が居を移す時代が到来する。大正後期のこの時期を中心とした鎌倉と浦和の文化人を、それぞれに「鎌倉文士」「浦和画家」と呼ぶようになる。

そして、昭和4年(1929)には鎌倉山分譲地の株主への土地分譲が開始された。これに伴う大船—江ノ島間の「自動車道」も完成し、翌年には大船—江ノ島間、鎌倉山—長谷間の「乗合自動車」が開業したという。

また、昭和11年(1936)1月には大船町に松竹の「大船撮影所」が竣工するなど鎌倉町とその周辺地域は、戸数や人口の増加のみならず、社会、文化両面で発展し、文学者や知識人、映画人・芸術家等の居住環境が次第に整えられていった。

続いて、「三方を山に囲まれた鎌倉」の外側に位置する地域も市内に含まれるようになる。それは、昭和14年(1939)11月3日に鎌倉町と腰越町が合併し、鎌倉市(第1次鎌倉市)が誕生した。その後、昭和23年(1948)1月1日に深沢村、同年6月1日に大船町を編入して、現在の鎌倉市となった

このような経緯から、大正時代から以降は多くの文学者らが鎌倉に滞在したり、暮らしやすくなった。鎌倉は多くの文学者らに愛され、作品に登場し、鎌倉は文学都市として成熟するようになっていく。

ここでは、鎌倉にゆかりのある文学者らを紹介する。敬称は略しました。

*上巻掲載と同じです。

鎌倉文士と文化人ら

下
巻

目次	P1
生没年表	P2
鎌倉地名地図	P4
奥付	表3

鎌倉市の成り立ちとゆかりの作家・文化人ら

表2	
42 舟木重信と材木座	P6
43 小牧近江と稲村ヶ崎	P8
44 小島政二郎と二階堂	P11
45 吉屋信子と吉屋信子記念館	P16
46 大佛次郎と大仏裏手に住んだペンネーム	P19
47 菅忠雄と二階堂	P24
48 川端康成と佛日庵(円覚寺塔頭)・甘縄神明神社	P26
49 林不忘(長谷川海太郎)と向福寺	P32
50 三好達治と鎌倉極楽寺姥ヶ谷	P35
51 中山義秀と真杉静枝と極楽寺	P40
52 吉野秀雄と瑞泉寺	P44
53 真船豊と円覚寺塔頭帰源院	P48
54 小林秀雄と妙本寺	P52
55 島木健作と浄智寺	P57
56 神西清と二階堂	P61
57 小津安二郎と北鎌倉	P65
58 深田久弥と二階堂	P68
59 林房雄と報国寺	P72
60 小林勇と扇ガ谷	P75
61 星野立子と鎌倉大仏	P77

62 今日出海と二階堂	P80
63 竹山道雄と材木座	P83
64 堀辰雄と小町	P86
65 永井龍男と瑞泉寺	P91
66 松本たかしと浄明寺	P94
67 石塚友二と「ぬる爛の句」	P98
68 中原中也と寿福寺	P100
69 高見順と東慶寺	P105
70 津村信夫と鎌倉	P109
71 太宰治と鎌倉	P114
72 大岡昇平と「大岡アイドル氏」	P120
73 横山隆一と「日本一素敵」と言われるスターバックス	P123
74 中村光夫と扇ガ谷	P126
75 清水崑と荏柄天神社の「かっぱ筆塚」	P129
76 山崎方代と瑞泉寺	P132
77 田村隆一と妙本寺・光明寺	P136
78 三島由紀夫と鎌倉文学館	P139
79 胡桃沢耕史と二階堂	P143
80 中野孝次と鎌倉	P148
81 立原正秋と鎌倉宮	P152
82 澁澤龍彦と浄智寺	P157

42 舟木重信と材木座

舟木重信(1893~1975)は、小説家、ドイツ文学者。小説家舟木重雄(1884~1951)の弟。東京府立第三高等女学校(現・東京都立駒場高等学校)生徒、舟木芳江は妹である。小説家・島田清次郎(1899~1930)は、「舟木芳江事件」を起こし凋落した。

明治26年7月27日、広島県江田島に、海軍少将舟木鍊太郎の次男として生まれ、六高に入学した舟木重信は、「雪山(俊夫)先生を想ふ」において当時を回想している。

「私が岡山^の第六高等学校に入ったのは明治四十四年であって、入学するとすぐ先生にドイツ語を教へていただいた。先生はその一、二年前に独語の主任教授として岡山に迎へられたといふことであつた。当時六高には年長のドイツ語の有名な大家が多くゐられたのでまだ若い先生がそこにその主任教授として迎へられたことは非常に名誉なことであり、先生の人格学識が既に高く評価されてゐたことを証明してゐる。(中略)ことに当時世界的に称賛されてゐた新浪漫派、「若きヴィーン文学」についての先生の批評紹介は私達文学青年を魅了したものである。三年生になった時、私は先生にお話してドイツ文学科に行くことにきめたのであるが、その頃ドイツ文学科に行くのは私一人であつた。ところが先生はその私一人のために特に授業時間をつくつて、私一人に向つてドイツ戯曲と文学史を教へてくださった。実にありがたいことで、それは生涯忘れることが出来ない。私は先生のドイツ文学の初めての弟子であつた。」。

大正4年(1915)11月、舟木は東京帝国大学在学中、肺浸潤のため葉山に転地療養する。

大正7年は、東京麻布区材木町六九に在った。

大正8年(1919)7月、舟木重信は、神奈川県鎌倉町材木座三五五番地、

進藤兵蔵様方に在った。同年短編集『楽園の外』で作家として認められる。同年ファシズムに抗する学芸自由同盟の結成し書記長となる。

同9年、早大独文科創設以来早稲田大学教授として教鞭をとる。

大正10年3月中旬、鎌倉に遊び、材木座能蔵寺二四番地に滞在する。

同年4月20日ごろ帰京する。

大正12年(1923)3月14日、材木座中島六九四番地に転居する。

兄舟木重雄の文学仲間(同人雑誌『奇蹟』)である葛西善蔵(1887~1928)、宇野浩二(1891~1961)、広津和郎(1891~1968)らと親交があった。

大正13年(1924)5月6日、舟木重信は、妻重体の報に洋行先から急いで帰国し、横浜に上陸した。その足で茅ヶ崎南湖院に入院中の妻を訪ねるが、すでにその朝死去していた。

その後はハイネやゲーテの研究に専念した。昭和11年(1936)9月17日『ゲーテ・ハイネ・現代文藝』刊行。

昭和25年(1950)、ドイツ人女性エリーゼ・クリニッツ(Elise Krinitz)が書いた晩年のハインリッヒ・ハイネ(1797~1856)との交遊録(Lesdenu'ers]w sde Heim'ch He2'ne)を『詩人ハイネの臨終の恋』として訳出し、著者の紹介文とハイネ小伝とを添えて出版。昭和41年(1966)評論『詩人ハイネ・生活と作品』で日本芸術院賞受賞。

舟木重信は、昭和50年4月29日死去。81歳。



船木重信兄重雄の文学仲間の宇野浩二
「アサヒグラフ」1949年3月9日号

43 こ ま き お う み 小牧近江と稲村ヶ崎

小牧近江(1894~1978)は、社会学者、翻訳家。
東京の暁星中学中退後、代議士の父に伴われて16歳で渡仏。

第一次世界大戦(1914~1918年)に遭遇しながら、大正7年(1918)パリ大学法学部卒業。その間、ロマン・ロランに傾倒、新鮮な反戦平和思想を身につけ、小説家アンリ・バルビュスらの、インターナショナルを叫んだ「クラルテ運動」に参加。

日本大使館勤務後、帰国は大正8年(1919)で、10年ぶりであった。帰国後、革命歌「インターナショナル」を日本語に訳詞という。

大正10年(1921)2月25日から大正12年にかけて、小学校時代の旧友である金子^{ようぶん}洋文(1893~1985)らと小牧の出身地である秋田^{つちぎみ}県土崎^{みなと}港町で、土崎版『種蒔く人』創刊、第三インターナショナルを初めて紹介する。同年10月15日、東京版を再刊するも激しい弾圧を受け発禁処分などを受けた。その後、『文芸戦線』(1924年)などで無産階級文化運動を推進した。

大正11年(1920)11月、小牧近江は、前田フクと結婚。

大正14年(1925)9月、小牧は、子供達ら家族4人で鎌倉の稲村ヶ崎に移る。神奈川県警察部などから嫌がらせを受け、初めのうちは何軒か貸家を転々としたが、家を見て没年までここで過ごした。

昭和2年(1927)6月、労農芸術家連盟に参加、翌年5月「国民新聞」記者となる。昭和4年9月、在日トルコ大使館勤務となり、昭和13年(1938)12月まで続いた。

そして、昭和5年(1930)5月10日『肉体の悪魔』を翻訳刊行。小牧は一読して全篇にみなぎる反戦色に感銘を受け、友人の土井逸雄(1904~1976)を誘って

小牧近江 黄土社『ふらんす大革命』(1949)



これを翻訳した。

問題は筆名だった。「種蒔く人」の出版以来、小牧の身边には監視の目が光っていた。本名で出版することは危険であった。彼ら二人は小牧が住む鎌倉稲村ヶ崎の海岸を歩きながら相談しているうちに、目の前に荒波が立ち騒ぐ光景から「波達雄」というペンネームにすることを考えついた。こうして翻訳は理解のあるアルス社から出版されたが、案の定、荒波が立ってたちまち発禁処分となった。

昭和14年(1938)8月、フランス領インドシナに渡り、「印度支那産業」に勤務した。第二次世界大戦中はフランス領インドシナにあって民族解放運動にも関係したという。

昭和18年(1943)11月1日、ハノイの日本文化会館に勤務、昭和20年(1945)6月5日、日本文化会館事務所長となり、日本の敗戦を迎える。

収容所を脱出成功した小牧近江は、昭和21年(1946)5月、引揚船で帰国し、7年ぶりに鎌倉稲村ヶ崎に落ち着く。以後、鎌倉の文化運動や平和運動に長老として担ぎ出された。

昭和22年(1947)に小牧近江らが中心となり、会長・長谷川^{にょぜかん}如是閑(1875~1969)、副会長・関^{たい}口泰(1889~1956)を担いで「鎌倉をよくする会」が発足、事務局長は、独歩の息子・国木田虎雄(1902~1970)であった。

昭和24年(1949)5月3日、鎌倉駅前に一本の銀杏の木が植えられた。この木は、フランス大革命の「自由の木」にちなみ、二度と戦争を繰り返さないという決意をこめて、「平和の木」と命名された。

昭和25年8月、第一回ストックホルム平和大会に呼応し、小牧近江、高見順、中村光夫、久米正雄、川端康成が発起人となり「鎌倉平和大会」が開かれ、ペンクラブ会長川端が自ら起草した「宣言」を読み上げる。

そして、昭和27年(1952)8月には、「第1回海の平和祭」が材木座海岸で開催され、昭和33年(1958)8月の「第7回海の平和祭」において、鎌倉市は「平和都市」(歴史的文化遺産を持つ鎌倉の平和を守り続ける)を宣言した。鎌倉

は太平洋戦争末期にも空襲を受けなかった都市であるが、文化人が多く住んでいたために早い時期での「平和都市宣言」になったという。

市役所前には現在、名誉市民の故・平山郁夫が揮毫した石碑が置かれている。

「平和都市宣言 われわれは、日本国憲法を貫く平和精神に基いて核兵器の禁止と世界恒久平和の確立のために全世界の人々と相協力してその実現を期する多くの歴史的遺跡と文化的遺産を持つ鎌倉市はここに永久に平和都市であることを宣言する。昭和三十三年八月十日 鎌倉市 平山郁夫 書」。

なお、この木は、昭和46年(1971)に市庁舎敷地内に移され、現在に至っている。

小牧近江は、昭和24年(1949)4月中央労働学院長、昭和26年(1951)8月法政大学教授を務めた。

昭和32年(1957)3月、小牧近江は、日本ペンクラブ代表として事務局長松岡洋子(1916~1979)と共にロンドンの大会に出席した。同年9月には国際ペンクラブ第29回大会が東京で行われた。

他作品にはバルビュスの『クラルテ』などの翻訳紹介のほか、『ある現代史』(1965年)、『種蒔くひとびと』(1978年)などの回想記がある。

昭和47年(1972)8月、妻フクが死去。

小牧近江は、昭和53年(1978)10月29日、鎌倉の聖七里ガ浜病院にて死去。85歳。秋田土崎の善導寺に眠る。妻福子とは夫婦愛が生涯続いたという。長女桐山清井は、

「母は経済的にも大変だったと思うけど、泣き言も言わずにいつも矢面に立って、明るく父をかばっていた。父と母は仲が良く、子供心に楽しいわが家と思っていた」(『梨明の群像』)。

平成19年(2007)、小牧の全遺品は、秋田県に^{きたく}寄託された。

小島政二郎(1894~1994)は、小説家。

早くから江戸文学や外国文学に親しみ、永井荷風、森鷗外に心酔する。京華中学を経て、慶應義塾大学文学部在学中に、『三田文学』主幹で西洋美術史家の澤木^{よもきち}四方吉(1886~1930)から教えを受け、『三田文学』で作品を発表し始める。

大正5年(1916)に先輩作家の文章について批評した『オオソグラフィ』は森鷗外から認められるなど、学生時代から慶應義塾関係者内において、その名は知れ渡る。卒業後は鈴木三重吉(1882~1936)が主宰していた児童雑誌『赤い鳥』の編集に携わる。



小島政二郎 読売新聞社「家庭よみうり」401号(1954年)

卒業間際の大正7年(1918)2月2日、小島政二郎は鈴木三重吉の紹介によって、芥川龍之介(1892~1927)を初めて訪ねた。

それ以後面会日の日曜にやってくる常連の人物、佐佐木^も茂^{さく}索(1894~1966)・瀧井^{たき い}孝作^{こうさく}(1894~1984)・南部^{なん}修^ぶ太郎^{しゅう たろう}(1892~1936)と合わせて「龍門の四天王」と称された。

同年8月下旬、小島政二郎は、菊池寛(1888~1948)、久米正雄(1891~1952)、江口^{かん}渕(1887~1975)、菅忠雄(1899~1942)らと、鎌倉の芥川龍之介に招か

れて行き、俳句の運座を開く。

大正11年(1922)初夏、鈴木三重吉妻・らく(楽子)の妹みつ子と結婚した。12月には長女・美龍^{みりゅう}が誕生している。

同年、『一枚看板』『家』により作家的地位を築き、『人妻椿』など風俗・大衆小説で人気を博した。代表作に文壇的回想録でもある『眼中の人』、伝記小説『円朝』や『鷗外荷風万太郎』、随筆『場末風流』など。

昭和3年(1928)1月3日、小島政二郎は鎌倉に行き、佐佐木茂索の家に遊ぶ。二人は『芥川龍之介全集』の編集に従事しており、校正の話はなるべくしないようにしようとしたという。

昭和5年(1930)10月、小島政二郎は、鎌倉由比ガ浜の塔ノ辻一五六に転居する。同8年7月東京に移転。

昭和19年(1944)5月、小島政二郎は、鎌倉比企谷一一三七番地、妙本寺境内に疎開する。

その後は雪ノ下と移り、昭和39年(1964)から没年まで二階堂に居住した。

1950年代以後(昭和25年以後)は、その発言・記述が文壇において物議を醸し、時に軋轢を生じる結果となっている。長く務めた直木賞選考委員も最期は事実上解任されることとなり、長年の盟友であった佐佐木茂索からも遠ざけられた。

70歳を超え、文壇の長老の位置に属するようになって『鷗外荷風万太郎』(1965年)では慶應義塾の先輩である久保田万太郎(1889~1963)の人間性について徹底的な批判を、『聖体拝受』(1969年)で、人及び芸術家としての谷崎潤一郎(1886~1965)を描き、谷崎の『痴人の愛』(1924年発表)が、義妹・小林せい子(のちの和嶋セイ)(芸名・葉山三千子)(1902~1996)との恋愛実事に基づくとされる、文壇における公然の秘密を書き記し、若き日に師事した芥川の人と文学の秘密を赤裸に暴く『芥川龍之介』(1977年)など、筆に衰えは無く、むしろ鋭さを増していく。

昭和41年から同居、昭和42年(1967)4月に正式に婚姻届を出した32歳下

の二番目の妻・嘉寿子(小島視英子^{みえこ})(1925~2009)は、福井生まれ、鳥取育ち。女学校卒業後学徒動員で大阪に出る。三度の結婚を経て、昭和41年(1966)三人目の夫と離婚。戦後から小島政二郎と関係があり、その後結婚、本名は嘉寿子だったが、姓名判断で改名。オチャメでお転婆、齒に衣着せぬ放言や、だれに対しても物怖じしない屈託のない態度が興味をひかれ、『甘辛春秋』(昭和43年(1968)夏号)に書いた「マイ・ディア・ドンビキ」をきっかけに、いろいろと執筆の仕事が舞い込むようになり、翌年には『現代不法教室』(1969年)を刊行。

いっぽう小島政二郎のほうも「若い妻と老いた作家」という題材を得て、私小説への情熱を燃え上がらせると、『眼中の人(その二)』(1967年)・『美龍と共に私はあるの』などを精力的に発表し、昭和45年(1970)1月、中央公論社から作品集『妻が娘になる時』が出たときには、

久しぶりに自分の芸術小説の本が出ることになってうれしい!

と、喜びを露わにした。

『妻が娘になる時』は同年、TBSテレビの東芝日曜劇場でドラマ化され、視英子はTBSの「あなたは名探偵」に解答者の一人としてレギュラー出演し、昭和46年(1970)~翌年『サンデー毎日』で「小島視英子・政次郎の不法対談」でゲストを招いての対談を連載。だが昭和47年(1971)6月15日、翌年7月12日と続けて万引き事件を起こし、表舞台を去る。

「十二日午後五時五十五分ごろ、鳥取市川端二、鳥取県東部生協(広田幸一組合長)二階衣料品売り場で、中年の女性二人が、くつ下など衣料八点(九千九十円相当)を万引きしたのを、店員がを見つけ、鳥取署に突き出した。同署の調べでは、(中略)作家小島政二郎氏夫人、視英子こと嘉子(四五)と、(中略)無職和田美樹(三〇)で、(中略)調べに対し、視英子は、はじめ和田嘉子と名乗り、万引きは、美樹がやったといい張ったが、追及され二人でやったと自供した。」—『読売新聞』昭和47年(1972)7月13日夕刊「里帰り先で万引き また小島政二郎氏夫人」より」。

ストリア、西ドイツ、フランス、スペイン、イタリアなどを回った。

罰金7万円の有罪となった、昭和44年10月15日の「サド裁判」の最高裁終結後は、何度かの外国及び国内旅行に足を運ぶ以外は、北鎌倉の自宅に閉じこもる生活を送っていたという。機会を見つけては、鎌倉市街を取り囲む山々を、龍子を伴い巡り歩くこともあったという。澁澤龍彦は、書斎派といわれながらも植物・鳥類・昆虫に詳しく、四季の中に独自の美を見出していた。

入院生活の最中も『高丘親王航海記』を書き継ぎ脱稿したが、澁澤龍彦は、昭和62年(1987)8月5日、東京慈恵会医科大学附属病院にて死去、59歳。鎌倉浄智寺に眠る。

亡くなる半年前と5日前に、澁澤龍彦に会ったという、前妻の矢川澄子は、「人並みの幸せを追い求めるのはやめようね」それが澁沢龍彦の口ぐせだった。「おにいちゃん」と呼んだかつての伴侶との10年の結婚生活を偲ぶエッセイ17篇『おにいちゃん—回想の澁澤龍彦』(1995年)を出した。

矢川澄子は、平成14年(2002)4月、長崎市内にある父の墓を訪れ、帰途、神戸で闘病中の多田智満子(1930~2003)を見舞うのだが、そのわずか1ヶ月あまり後の5月29日、信州黒姫山(長野県上水内郡信濃町)の自宅で縊死しているのが発見された。東京都八王子市上川町の上川霊園に眠る。

妻龍子は、夫と過ごした18年間の日々を静かにふりかえる、エッセイ『澁澤龍彦との日々』(白水社)を、平成17年(2005)に出した。

異才龍彦との出会いと結婚、日々の生活、海外への旅、三島由紀夫をはじめとする作家や芸術家との交友、そして最後の日々を思い出とともにふりかえる。

■主な参考文献(順不同、上巻に続く)

- 『ある現代史—「種時く人」前後』1965年 法政大学出版局 ○『小島政二郎全集 第十二巻』1967年 鶴書房
○山田幸伯『敵中の人—評伝・小島政二郎』2015年 白水社 ○小島政二郎『眼中の人』1995年 岩波書店
○小島視英子『天味無限の人 小島政二郎とともに』1994年 彌生書房
○吉武輝子『女人 吉屋信子』1982年 文藝春秋 ○田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子』上下巻1999年 毎日新聞社
○吉屋信子『自伝的女流文壇史』2016年 講談社 ○『大佛次郎—私の履歴書/猫の風呂番』1999年 日本図書センター
○羽鳥徹哉編『作家の自伝15 川端康成』1994年 日本図書センター ○川端康成『天授の子』1975年 新潮社
○菊池達也『長谷川海太郎 一人三人(谷譲次・林不忘・牧逸馬)の大家作家』2002年 からくま春秋社
○『三好達治—暮春記/魂の遍歴』1999年 日本図書センター ○『中山義秀 日本文学全集51』1966年 新潮社
○林真理子『女文士』1998年 新潮社 ○十津川光子『悪評の女 真杉静枝の伝記』1968年 虎見書房
○吉野秀雄『やわらかな心』1996年 講談社 ○赤松大麓編『吉野秀雄集』1982年 彌生書房
○『生誕100年記念展 歌びと 吉野秀雄』2002年 神奈川文学振興会
○中林庫子『悲劇のシステム 作家Mと甘粕大尉』1995年 紅書房
○吉田熙生編『作家の自伝 92 小林秀雄』1999年 日本図書センター
○『武田麟太郎・島木健作集』1980年 講談社
○石内徹『神西清文藝譜』1998年 港の人 ○宮本明子・松浦莞二編『小津安二郎大全』2019年 朝日新聞出版
○安宅夏夫『「日本百名山」の背景—深田久弥、二つの愛』2002年 集英社
○深田志げ子『私の小谷温泉 深田久弥とともに』2015年 山と溪谷社
○小林勇『一本の道 新装版』2012年 岩波書店 ○『星野立子全集』2000年 梅里書房
○今日出海『山中放浪』1991年 中央公論社 ○今日出海『私の人物案内』2012年 中央公論新社
○平川祐弘『竹山道雄と昭和の時代』2013年 藤原書店
○『作家の自伝 52 堀辰雄』1997年 日本図書センター ○永井龍男『東京の横丁』2016年 講談社
○『自伝抄I(川口松太郎 永井龍男 松本清張)』1977年 読売新聞社
○清田昌弘『石塚友二—俳人・作家・出版人の生涯』2002年 沖積舎
○『作家の自伝 54 中中原也』1997年 日本図書センター
○『作家の自伝 96 高見順』1999年 日本図書センター
○その他、諸本

編集にあたり、上記主な参考図書・本文掲載の関連図書や国立国会図書館デジタルコレクション、神奈川県や鎌倉市、鎌倉観光協会などの公式WEB、県立神奈川近代文学館・鎌倉文学館はじめ全国の文学館・記念館、大学や団体等のWEB也大いに活用させていただきました。資料の選択、異説などあると思われますが、弊社の総合的勘案で編集し掲載いたしました。ご了承のほどお願い申し上げます。

本書掲載の地図は、国土地理院発行の地形図をもとに作成いたしました。©ユニプラン 2022

鎌倉文士と文化人ら 下巻

～鎌倉にこだわり、九十六人(上巻五十人・下巻四十六人)のエピソード・住まい・恋・結婚・墓標などを記しました～

第1版第1刷 定価 1100円(本体1000円+税10%)

発行日 2022年4月15日

編集スタッフ ユニプラン編集部

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所/株式会社ユニプラン

〒601-8213 京都府京都市南区久世中久世町1-76

TEL. 075-934-0003

FAX. 075-934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所/株式会社プリントバック

ISBN978-4-89704-546-7 C0095